

インタビューにおける日本語学習者の感情表現
—「おもしろかったこと」と「かなしかった／怒ったこと」の比較—

橋本慎吾
(岐阜大学)

自身の過去の経験を語る場合、その背景となる感情が発話の音声特徴に反映されることはよくある。例えば、楽しかった経験と苦しかった経験を語る場合の全体的なトーンは異なる場合が多い。

では、日本語を母語としない学習者が自身の過去の経験を語る場合、母語ではない日本語の音声に、背景となる感情に結びつく何らかの反映を見ることができるだろうか。本研究では、日本語学習者に対して行なったインタビューを分析し、異なる感情を背景とする発話における音声的反映について考察する。

まず資料であるが、「最近（またはこれまでで一番）おもしろかった／たのしかったこと」と「最近（これまでで一番）悲しかった／怒ったこと」について短いインタビューをすることを事前に伝えておき、2週間程度時間を置いてから実施したインタビュー録音を資料とする。インタビューは学生1名と教師1名で対面で行なわれ、「おもしろかったこと」と「悲しかった／怒ったこと」の順に話してもらった。

このインタビューは、筆者が大学で行なっている「口頭表現」の授業の一番最後に実施した。「口頭表現」ではインプロやロールプレイなどの演習を行なっており、感情表現を意識した活動を意識的に取り入れている。このインタビューは、その過程を経た学習者の感情表現を示すという意味合いも持っている。

現在までの分析では、学習者なりの相違が見られるものと、あまり相違が見られないものがあり、相違が見られないのは、外国語を話すという行為において内容（及び背景となる感情）が反映されるわけではない（外国語だから乖離している）と考えられる。

今後、相違が見られるものと見られないもの間の違いについて、音響的事実を示す予定。また、相違が見られるものについて、その1部を抽出し、それを日本語母語話者に聞いてもらい、どんな話をしているかを選んでもらうといった聴取実験を行なう予定である。